汚れた夜

汚れた夜

石原慎太郎

新潮社版

汚れた夜

昭和三十六年八月八日発行
昭和三十七年五月三十日五刷

定価三二〇円

著者　石原慎太郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇〇)七一一一(代)
振替東京八〇八番

検印廃止

乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えします。

印刷　塚田印刷株式会社　製本　神田　加藤製本所
© by S. Ishihara, 1961. printed in Japan.

汚れた夜

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

出会い

夜だ、私は夜を見張り、夜を嗅いで廻る。それが私の商売だ。

私の捜す夜はどれも汚れて濁っている。しかし人間には、昼があるように夜もあるのだ。その夜の下でどんな人間がどんな生き方をしているか、その大方は私に関りないが、砂浜の中に落したライターを翌朝の散歩で踏みつけてまた拾うような偶然が私を仕事の中である人間たちに結びつける。たまにはその相手が死人ということもある。しかしそれも私の仕事だ。

一人の男を御紹介する。

三十五歳。身長一米七十七糎。体重七十五キロ。並の言い方で言えば大柄という奴だ。体はしまっている。筋肉には少しばかり人並以上のバネもある。腹もまだ不様に出てはいない。それも楽じゃない仕事のせいだ。

親族はない。父親はとうの昔に死に、母親は空襲で、弟は彼と隣り合わせの戦場で迫撃砲に首から上を吹き飛ばされて死んだ。

女房もいない。それも仕事のせいか。女は、いる。

頼れば、彼がその気になりさえすれば、大層頼り甲斐のある男だ。誰かがひねくれと言った。多分、女だろう。その言葉も時には当っている。しかし仕事は確かだ。少くとも私はそう思う。

能力はある。彼だって金と、もう少しの機会さえあれば、もっとましな仕事でもっとましな人間になっていたかも知れない。たとえばこの夜の下で、その手で自在に汚れた金を掻き集められるような、たまらない女を裸にし、酒を浴びせ、想像もつかぬ歓楽をわがものに出来るような人間にも。

だが金も、機会もなかった。だから彼は今言っただけの男だ。

その男は、私。

私の商売は、刑事だ。

やくざな商売と誰かが言った。確かにまともじゃない。必要となればやくざと慇懃を通じもする。がそんなことは当り前の話だ。

しかしなにが一体やくざで、なにがやくざじゃないと言うのか。

私もふくめて、私の周りにいるやくざな連中は、結局どれもみんなちっぽけな弱い人間だ。それだけの奴らだ。

幾つか、いろんな仕事を重ねる内に、私は、もっと大きな、大きすぎて眼に入らぬやくざな何かに気づく時がある。しかしそいつをどうしたらいいのか、私は知らないのだ。せいぜいが噛みつきたそうに、一人で毒づくぐらいが関の山だ。

私の紹介はこれくらいでいい。私がこの話の主人公ではないのだ。私がその主人公、秋月に会ったのも、仕事の中での偶然だった。

初めて彼を見た時、あの男はやくざの中にいた。他の誰よりもその生活に身をひたし切って見えた。しかしあの男は決してやくざじゃなかった。

私たちの最初の出会いは決して心持いいものではなかった。少くとも私にとっては。

私はその時の印象で後々まで彼を覚えていた。彼にとって私は一人の観客にすぎなかったかも知れない。

あるつまらぬ事件の、多分どちらが殺されてもいいような奴らのどちらかが片方を殺したといった事件の捜査で私は横浜へ行った。

何カ所か歩き廻り最後に夜遅くなって犯人がいるらしい、正確にはいたらしいという店へ入った。私の勘では捜している男は捜査が始った頃には何処か海の向うの土地へ飛んでいる筈だった。ある種の人間たちにはパスポートを持たずに海を渡ることは、警察やシナリオライターが考えているよりはるかに易しい話なのだ。

がともかく私はその店へ行った。半分は遊びのように。本牧の主に外国の船員相手のキャバレーだ。出入りする日本人の客は商売が目的の女か、男なら先ずどこか少々まともでないところのある奴、或いは余ほど酔狂な遊び人だろう。

酔っぱらった大柄な男たちに、女ならどうされてもとどのつまりは決っているが、男は何か起った時に素速い逃げ足か一寸したある種の体操の業でも持っていないと二十分と落着いて坐ってはいられないような場所だ。

店はそう混んではいなかった。がまるきり騒々しかった。いつか酔っぱらったハイチの船員が仲間のトランペットのファンファーレつきで、フロアの上で女を素っ裸にし自分も裸になって特別のショウをたっぷりやって見せたというような店だ。その噂は横浜署の刑事から聞いた。たといそこに居合わせても刑事は大方そんな時には黙っているものだ。

聞き込みというほどではないが、一寸当って見た後私は

飲んだ。刑事だって飲む。自分の金でだ。それに私はこんなところに集って来る連中が、割合いに好きだ。

騒ぎの中の騒ぎは私が坐って一寸して始った。周りが騒騒しいのでそれは暫く聞こえずにいたが次第に騒音の中を通してみんなの耳に聞こえ出した。

女が一人叫んでいた。並な声ではない。男の場合なら一昔前の刑事部屋でこんな声は始終聞かれたろうが。

女は隅のブースの中に、色の浅黒い大方メキシコ人だろう、三人の男たちに囲まれて身をよじりながら叫んでいる。それは人間の声というよりは、苛まれている雌犬の鳴ききしりだった。

女が身をもんで男にしがみつくと、彼らは笑いながらそれを他の仲間へ次々に突き放した。

「スパニッシュフライを飲ませやがったな」ウェイターとも用心棒ともつかぬ男が私の横でいった。

ウェイターの言った通りだ。それは可成り悪どい遊びだった。

スパニッシュフライというのは中南米で採れる強力な媚薬だ。並の強さじゃない。

三グラムも飲めば大きな、私ぐらい我慢のある奴でも自分をどうしようもなくなる。

女はそれを知らずに飲まされていた。薬が効いて来た女を男たちはげらげら笑いながら眺めている。女にしてみればもう商売どころではなかったろう。

女は唇をのぞけ、仕舞には自分の手で裾をたくし上げて男に飛びかかった。男たちは一層笑いながらそれを突き放した。

女はステイジのトランペットよりも甲高い声を上げた。周りの人間はみんな立ち上ってブースを覗いていた。

女が泣き叫びながら自分の手を裾へ走らせようとすると、男たちはその両手と両足を圧えつけた。手足を圧えられた女は男たちの間で半殺しの蛇のように胴体を叩きつけ波うたせた。蛇と違うのは女がこれも殺されかかったピューマのように泡を吹いて野蛮に吠えることだけだ。

確かにそこには残酷で陽気なメキシコがあった。

尤もこのショウを楽しんでいるのは酔っぱらったそのメキシコ人たちだけだったろうが。大方の人間は次第に興ざめようとしていた。他の女たちは顔を青ざめ誰かが男にしがみついて泣き出した。

その時、誰かが女を羽交絞めにしている男の顔に何かをぶっかけ肢を圧えている男の肩を蹴飛ばした。日本人だった。女は自由になり叫びながら椅子と椅子との間に落ち込んだ。

残りの一人がひどくのろのろした動作でその男に突っかかった。横へよけひっかけるように相手を外すと男はよろけて倒れかけた相手の首の辺りを殴りつけた。もう一人が男の腰の下にしがみつき、男はそれを蹴上げたが相手は離れなかった。手こずる間に残りの一人がお定まりの刃物を出した。が、近くにいたアメリカ人の船員が後からそれを殴りつけた。

男は刃物を持ったまま転っているもう一人の相手を無表情に見下したままでいる。誰かが手を貸さなくても彼は決して刺されず一人で充分に片をつけたろうという感じだった。事実、そうだったかもしれない。

男たちはのろのろ起き上って来た。それにはかまわず彼はブースの中でまだ叫んでいる女を引ずり出した。女は事情がわかってか今度は彼に向ってむしゃぶりついた。それを床の上へ突き放した。

バーへ歩いていき、何かを受けとると引き返し床の上へ仰向けに倒れてうなっている女に手渡した。女はひったくった。コカコーラの空壜だ。

彼が女を助けてやるつもりでそれを投げてやったかどうか私は知らない。しかしそれから始ったショウは今まで以上に非道いものだった。喜んだのは殴り倒されたメキシコ人たちだった。

気づいた時あの男の姿は見えなかった。それが彼、秋月範夫だったということを私が知ったのはもっと後のことだ。決して印象のいい出会いじゃない。

それから半年し、私がまた彼を見たのは横浜のあんな店とは随分違って、誰だったかともかくもある大臣が主催した園遊会でだ。

丁度小さな事件が片づいた後ある対外的な情報関係の事件の助け太刀でパーティにやって来る外国人とその周りの人間を張っていた。

立食のあるテーブルの横に白いタキシードを着て彼がいたのだ。六七人の連れがい、中に若い娘が一人。娘は余り美人ではないが愛敬があった。尤も誰かへのお目見えなのか緊張した顔で見たところ愛想のよさそうな口元はほころびそうになかった。要するに、彼と一緒にいる連中はひと眼で私達とは違う上流の、つまり借り着じゃなし自前のタキシードやカクテルドレスを実際に月に何度も使うことのあるクラスの人間たちだ。

彼は娘の空いたグラスに、コカコーラではなしオレンジのジュースを注いでやった。娘は堅くなった手つきで、グラスを持ち直してた。二人がその時どういう出会いだったのかは知らないが、多分彼という男のせいでだろう。彼に

向って只ならぬ彼女の眼つきでそれがわかった。
私は脇から眺めていた。
何故か彼だけがその周りの人間と違う雰囲気を持っていた。その場に居づらそうに、というよりは居たくなさそうに見えた。このパーティはこの男には似合わなかった。尤も痩せぎすな彼のタキシードの着つけは実にぴったりには見えたが。
考えてみると、あの横浜の店でも、彼は身の周りにあの場と違った雰囲気を、そして矢張りあの場所にどこか似合わずに見えた。
会がすすみ、暫くして覗いて見た建物の中のバーに彼が一人で飲んでいた。これは似合っていた。入っていった私を黙って見つめる。渡ろうとする川の底にきらと光る何かがあり、足ぶみさせるような、無表情な眼の底にちらと相手を咎める光があった。
嫌いなのか、マティニのオリイブが楊枝を刺したまま机の上へ放射状に置かれてある。後一本置くとそれは星形になる。
彼は一人で古く大きなダイスの壺を振っている。手つきは器用だ。注意すると右の掌の甲に大きな傷跡があった。小指が効かないらしく同じ角度のまま動かない。横浜でメキシコの船員の首を手刀で殴った訳がわかった。〝捜せばこ奴の体中にはまだ他の傷があるだろう〟
私は思った。
小一時間して通り過ぎた玄関のロビーの隅で私はまた彼を見つけた。先刻、テーブルの側にいた初老の婦人が一緒だ。二人は低く口早に何か言い争って見えた。
気づかれぬよう私はゆっくりその後を通りすぎた。
「いい加減におし」
「その通りさ、ママ。この話が必要なのは僕よりもあんたの亭主じゃないのか」
彼は答えた。ママを、あんたと呼んで。
彼女は黙っていた。
私は通りすぎもう一度ゆっくり振り返って二人を眺めて見た。二人は依然黙って向い合ったまま立っている。二人は親子というよりはなぜか他人に見えた。何かを言い争った後という訳だけではなしに、二人の様子は他人以上に険悪に見えた。少くとも私はそう感じた。
やがて彼女の視線を外すように煙草をくわえ火をつけ、
「ま、なんとか努めては見ますがね」
小さく肩をすくめるように微笑し直しもう一度母親の顔を覗き込むと彼は踵を返し私の前を通ってゆっくり玄関へ出ていった。

私は母親よりも息子の方に気をとられた。玄関のポーチで立ち止り、煙草をはじき、外の夜を一人眺めている彼の後姿に私はあるものを感じた。旨く言えないが、そこに一人でいる彼は今まで何か言い争っていた彼女の、母親の矢っ張り子供だという感じだ。

玄関側の窓から私が彼を見守っている間に母親は奥へ姿を消していた。

やがて、いかにも夜の中へ歩き出す、というように彼はゆっくりポーチを出ていった。

暫くしてけたたましい爆音がモータープールの方から響くと、広いとはいえぬホテルの玄関前の広場を白く小さい競走用の車が五十マイル近い速さで門に向って消えていった。

ペイジのボーイが回転ドアのガラスに額をぶつけるようにして覗いていたが、車の姿は迷い込み飛び去っていった鳥のように、あっと言う間に見えなくなった。そして、加速する車の挑むような爆音だけがいつまでも聞こえていた。多分その音はあの母親の耳にもとどいたに違いはない。それを聞いて彼女は眉をしかめただろうか。

私は会場に戻った。

彼女は先刻のテーブルの側にいた。あの娘も、先刻の連れたちもいず、年輩の男が一人話し合っている。

二人の様子は親し気、というよりはもっと内輪だったが、女の方がどこか一段高い姿勢で話をしているように見える。男は彼、秋月とはどこも似た様子がない。が男の顔には見覚えがあった。

半白の髪はきちんとした櫛の目でわけられ、おかかえの床屋が手を尽したように髪の毛の一本一本が磨かれて光っていた。議員のバッジをつけた男が挨拶して過ぎると男は流し眼に、しかし見据えるような表情で餌き返す。印象は冷たかった。精密な頭で計算だてた通りのことを並の人間には出来ぬ執念深さでやり通す、といったタイプの人間だ。なんとはなし、私が好かないタイプの。

尤も、そういえば刑事だってそうでなけりゃ勤まらない。しかし刑事にはもう一つのものがある。それは——、まあいい。

丁度仲間の刑事が通りかかった。

「あのテーブルにいる男は誰だ」

彼を捉えて訊いた。

「知らねえな。どうせお偉方の豚野郎の一人だろうさ」

彼は唾を吐きたそうな顔で答えた。

私はそういった仲間に矢っ張り一瞬の友情のようなものを感じた。勿論招かれた訳じゃあないが、こんな集りの中

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

にいるとなぜか私は胸が悪くなるのだ。

私たちの張り込みの成果はどうやら期待していたほどのことはなかった。それでもこの場違いの会場の中を私もせいぜい恰好をつけて歩き廻った。しかし刑事の張り込みとは見られなくても、見られてせいぜい誰かの護衛といったところか。

尤も主任はタイプを選んだとは言った。すると私は仲間内じゃお上品という部類か。そいつはお笑いだ。先刻の仲間の本音を聞いて言う訳じゃないが、私は、好きな女との約束を反古にして重役の家の夕飯に呼ばれていった勤め人のようにいらいらといつまでもその場に馴染めなかった。

ぶらぶらして廻りながらなんとはなし時々彼女と相手の男の方を眺めた。やって来るか来ぬかわからぬ人間を見張るより、すぐそこにいる人間を眺めている方が矢っ張り面白い。それに先刻ロビーでのあの親子の印象が私の心をひいた。と言っても商売柄な注意からではない。ただ多分、あの男に私が感じた雰囲気のせいだろう。

二人はひどく熱心に話し合っていた。表情が真面目すぎるので話題がその集りには関りないことだと知れる。集っている大方の人間は上ついた作り笑いでうんざりするほどきざったらしい作りごとの会話を交している。こんな会なんぞ欲ばってまかされた他人の金を一人で費い切れずに帳尻を合わすだけのための集りなのだ。

知らん顔で二人に近づいて見た。近づきすぎると、他人を感じた彼女が咎めるように私を見つめた。私が会釈すると曖昧な微笑で彼女も頷きかかり、思い直したように男の方を向いてしまった。私なんぞ眼にもとまらなかったというように。

しかし人を見つめる時の眼は彼に似ていた。一番底にある光が。それに迂濶な話だが、近づいて見つめられ初めてどきりと感じたが、彼女は美しかった。若い頃はどんな美人だったろう。五十五六か、少し年はとりすぎていたが、女は年齢だけじゃ計れないという見本のような女だ。

正面から見つめられてわかるが、特にその眼が奇麗だ。この女の美しさの焦点は眼だったろう。いや今もだ。他の部分は流石に色褪せはしたがその眼だけはひどく若々しかった。恐らく五十半ばの今でも、彼女は、試験を受けて緊張する若い踊り子のように野心と艶っぽさの入り混ったきらきらした眼で人を見るに違いない。現に、相手の男を見つめる眼ざしは時々そんな具合に光って見えた。

中背だがその居ずまいは若々しくしゃんとして見える。辺りの人間の内を捜したが、年齢を問わずに彼女のような感じの女は他に見当らない。つまり、彼女に非常に個性が

あるのだ。そういうことだ。
側を通り過ぎる客たちの中に見知りの新聞記者がいた。昔、察廻りのキャップをやっていてある事件の時食い下られたことがある。その後昇進してもう少し上品な部へ配属変えになったそうな。その男がここにいるのも意外だった。向うも私を見て同じだった。しかし聞屋も刑事も大抵思いがけないところにいるものだ。
彼に訊ねて見た。
「あのテーブルで二人で話している男は誰かね」
「村井卓馬さ、前の衆議院議長の」
なるほど、見覚えがあった筈だ。
「女は」
「だからあれが秋月美津、細君だよ」
これで私は彼の姓と、義理の父親の名前を知ったのだ。

事件

季節がいくつか変って、またその変り目の冷たい雨が降りつづいていた。やって来ようとしている季節のようにもかもが暗く陰気だった。
雨は坂道を上っていく老婆みたいに時々息つくように止みはしたが、空は厭な色に覆いかぶさったままで下水はあふれたまま水がひかずにいた。
大通りでは車があふれた水を力の足りないランナーボートぐらいの勢いで跳ね上げ水尾を作りながら走っていく。水尾に掻き分けられた下から黒いアスファルトが覗いたが、すぐまた濁った灰色の水に沈んでしまう。
昼前というのに太陽はわれわれ人間には関係のない遠いどこかへいってしまっていた。薄暗い部屋の中では窓際でも明りをつけないと書類の字が読めないくらいだ。
見下した通りの交差点に黒い雨合羽を着込んだ交通巡査が立っていた。その足元を車のたてる 漣 が洗っている。

遠くから眺めると彼の姿はこの雨で生えた茸みたいだった。

その合羽の下で彼がどんな表情で頭にかかった雨のしずくを拭っているかがわかる。雨はきっと厭な味がするに違いない。

車のとばちりを食って交通巡査もつらいが、こんな日何かで外を歩き廻っている仲間はたまらなかろう。私は丁度非番で部屋にいたがそれでも気がめ入った。こんな日は自分の部屋で火を入れ寝転んで、誰か側にいれば尚いいが、酒でも飲みながらどこか他所の国の自家用車を乗り回す二枚目の刑事のテレビ映画でも眺めていたいものだ。

それがせいぜい刑事の見る夢だ。

逆に夏の暑い時には、十日も休暇をとってどこか高く涼しい山の上の小屋で新聞も読まずラジオも聞かず誰かと一緒にぼんやりしてみたい、或いはせめて冷房のよく効いた部屋で背骨をいらいらさせない椅子に坐ってのんびり今まで自分の挙げた犯人の調書にでも眼を通していたい、と思う。

しかし要するにどちらもかなわぬ夢だ。

暑くても寒くても、こんな憎たらしい雨の降る日にも犯罪はある。必ず誰かが何かを起す。全くこんな日に挙げた犯人はその場で縊り殺してやりたい。

この建物中にも犯罪者がいた。留められている奴や新米たちが。いくらふて腐れてみても彼らの視線は落着かない。鼠のような眼をした窃盗、唇をひん曲げて見せている強盗、答える前に何かを懸命に計算している恐喝、呆うけた眼を床に落したきりの殺人、要するに彼らはこれを送らなければならない時間と自らがやったこととがどれほど採算の合わぬことかをもう少しよく知る必要がある。

しかしそれでもまた必ず誰かが何かをやる。絶えることなく。ということは誰かはきっと採算がとれているのだ。

刑事は少く、刑事以外の人間は多い。当り前の話だ。だから刑事はいつも先刻言ったような夢を見るしかない。これも当り前な話なのか。

私は坐ったままこれで何本目かの煙草をつける。煙草はしめってい吸い込んだ煙は汚れた雨の臭いがした。

眼の前の電話が鳴った。私は外の雨を確かめながらゆっくりそれをとった。多分また何かがこの雨の中から私を呼んでいるのだ。

電話は私のためにかかって来たようなものだ。なんとはなし、がともかくも手が空いているのは私一人だったのだから。電話を報告した私が結局レインコートを着直すということになる。もう一人の同僚は戻り次第かけつけるだろう。

トレンチのベルトをしめ上げながら電話を反芻してみた。

要するにどこかで水の中に落っこった車が発見された。その中に人が一人死んでいた。多分溺れてだ。それが若い女ということだ。嬉しい話だ。

それについて、周囲の事情から押して多少の疑点があるという。一体何が疑点なのだ、この雨だというのに。

幸い出がけにパトロールカーを摑まえた。学校出たてのような若い搭乗員は私を乗せると気負ってサイレンを鳴らし車を飛び出させた。車に乗っている奴らは大抵ろくな事件に出っ食わしはしない。せいぜいが酔っ払いの喧嘩かもう逃げてしまった後の強盗騒ぎだ。死人を見るのは派手な交通事故くらいだろう。私がいこうとしているところには少くとも死人はいる。しかも若い女の。

私は後の座席でシートにしがみついていた。車は他の車を蹴散らし止っている車の窓ガラスにいやというほど水を跳ね返して突っ走った。レインコートも着ていない癖にこ奴らはこのまま海の中まで突っ走っていこうというのか。

サイレンは派手に鳴っても雨は一向陽気なものじゃない。ましてこの雨の中を御丁寧に水際へ出かけようというのだ。私は長靴をはいて来なかったのを後悔した。いや、こうなれば私にもあの交通巡査の雨合羽が必要だった。

車は相変らず速度を落さず水たまりの下の電車のレールで幾度もスリップしながら瞬く間に新宿を過ぎた。事故の場所は吉祥寺の井ノ頭公園だ。いや正確にはその池の中だ。

「殺しなんでしょうかね」

無線電話をいじくっている方の巡査が訊いた。

「ただの事故さ」

「そうですかね」

彼は不服そうに言う。こういう警官のために誰かがせいぜいサービスに人殺しでもしなくちゃなるまい。当人たちはただ電話を聞いては子供みたいにあちこち飛び廻るだけなのに。軍隊で言えば、援護射撃の大砲のそのまたずっと後に坐っている若僧の参謀のような奴だ。そしてこちらはいつも泥の中にいる歩兵だ。

こういう手合いに限って威嚇ともつかぬ曖昧の射撃で何でもない人間を殺したりする。

「どうなんですかね」

運転してる方も言った。

それがこの車の中でわかるくらいなら刑事はいらぬというものだ。

「ただの事故だよ。大方この雨で道が見えずに飛び込んだ

のだ。その程度の連中が運転している車はそこら中に走ってるぜ」

車は公園に走り込んだ。

どうやら私は池の中へ入らずにはすんだ。車はもう水の中から引き上げてある。青い洒落たモリスだ。車の近くの茶屋の軒先に新しい菰がかぶせてあった。間の抜けた運転者がその下にいるのだ。

ともかくも私は観念して車を下りた。雨は容赦なく降りかかった。車のヒーターで乾きかかっていたレインコートはすぐに色が変りブロンズみたいに光りだした。私はすっかり不機嫌だった。

待っていた警官たちもやって来たのが私一人と見てか不服そうだった。こんな天気だ。例外もあるさ。なにしろ互いに因果な商売だ。

パトロールカー警官たちは濡れるのもかまわず飛び出してかけられた菰の下を覗いている。言っていた癖に電話係の方は、すぐに胸の悪そうな顔になった。

私は説明されて周囲の状況を見て廻った。池を巡った道路がその辺りへ来て小広い広場になっている。車が落ちた辺りは丁度水の落ち口になっていて大分深い。それでなくても連日の雨で水嵩がましている。池のへりは落ち口の水門をつくるためにコンクリートで固められて、他の部分と比べいわば水に向って切り立った形になっていた。道が広場になっている辺りへ来て視界を失った車が、見当をつけて走り出し運悪くも、その部分から池の中に落ち込み小さい車なのではずみに水中で転覆したのだ。

男が一人近づき警官に不服そうな顔で何か言うと肩をすくめて戻っていった。車を池の中から曳き上げた起重機車の運転手だ。リッカーは太い触角のようなウインチを元に戻すといまいましそうに空廻りした車輪で泥を跳ねつけ重そうに体をゆすりながら帰っていった。雨の中のただ働きは警官や刑事だけではなさそうだ。

曳き上げられた車の側にはこの天気にもかかわらずどこから聞いて来たか野次馬が十五六人も立っている。傘をささぬ男までいる。彼らが屍体に近づきかかるとパトロールカーの警官が注意した。少しは役に立つ。

車は前のバンパーが少し曲っただけでどこも壊れてはいない。ただヘッドライトや屋根に泥がつきバンパーとラジエイターグリルに水底の水草がくっついていた。

曳き上げたままの車は運転席側の窓ガラスが四分の一ほど開いている。水はここから入り込んで中の人間を溺れさせたのだ。車の中は泥だらけだった。

逆さになった車の中で流れ込む水と泥を飲みながら溺れていくのはやり切れないに違いない。叫んでもどこにも、

誰にも聞こえはしない。こうなると水の深さは二米でも二千米でも違いはない。浮び上れない潜水艦乗りと同じだ。恐怖に見開いた眼の前に、ついたままのヘッドライトが暗い水の底を照らしていたことだろう。

池の面をまたひとしきり雨がしぶいて渡って来る。

「で、どういう具合だったんです」

私が言うと、警官にうながされ一緒にいた一人の男が進み出た。沢山饒舌りそうだった。手で制すると私は菰をめくって女の顔を見た。

見覚えがあった、ような気がした。

屍体という奴は初対面で、全く見たこともない奴か、どこかで見覚えのあるような気のする相手かどちらかだ。実際には知りはしないのだが、しかし同じものを何度も見ていると本当に知り合いだったような気になる。生きている手合いよりそういう度合いが強い。

電話の通り若い女だ。口元が歪んでいる。確かに思いもしない出来事が彼女の身に少し前に起ったのだ。掛け値なし夢にも思わなかったことが。そしてそれ切りだ。なにもかも。彼女はこれでいつ始るかわからぬ遠い振り出しに戻ったことになる。

私は屍体を見るといつも妙な気持になる。非常に複雑な因数分解を解いてみると、あっ気ない、甚だ簡単な答が出たような。

それに屍体はその人間が誰ということに関りなく、私を妙にセンチメンタルにする。その答のあっ気なさのせいだろうか。屍体だけを長いこと見つめていると私はふと事件とは全く関係のないことを考えかけてしまうのだ。この商売には余り好ましい癖とは言えまい。

私が向き直ると警官にうながされた男は気負い込んで話し出した。男は周到に雨合羽を着ている。車を曳き上げるのにもこの男が活躍したのだろう。

男はこの池の貸しボートの番人だった。雨で水が増したせいで繋いであったロープが外れ流れ出たボートを拾いに漕ぎ出した時、丁度さした漕ぎ竿が車に当ったのだそうな。最初はわからなかったが、竿で探る内に様子が知れ思い切って水に入って見て確かめたと言う。

「偶然だな」

私も、多分最初に訊問した警官と同じように疑わしそうな眼で言った。

「全くの偶然です」

男は力を込めて繰り返した。半分疑われてがえって面白そうにむきになって見える。この季節ではボート屋も暇だろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c